

# 欲しくない指輪

徳永直

一

「あがり——いッ」

お桂ちゃんは、ハズンだ声でどなりました。

「ホイ、きた、お次ぎ……」

運搬屋の爺さんが、つぎの口絵のたばを、ドンと仕事台の上に乗せてから赤い紙を一枚おいて云いました——

—合わせて三丁——

「あいよ」

お桂ちゃんは、東にくくったヒモをハサミで切ると、パラパラと、口絵を順々に、仕事台に並べました。キレイな油絵や、美しい洋装の令嬢の写真や、めずらしい動物の画や、赤、緑、セピア、紫、とりどりの色が、八通り束にして、ズンと仕事台へひろがりました。

チャツ、チャツ、チャツ……。

お桂ちゃんは、肩と頭とで、調子をとりながら、器

用に一枚ずつ、八通り拾いあげて、ポンとつきそろえろと、片っ方に積みかさねて、また一枚ずつ、チャツ、チャツ、チャツ！

お桂ちゃんのしている仕事は、「帳合い」といつて雑誌の口絵を揃えるのです。お桂ちゃんは製本女工さんです。

二

お桂ちゃんのうちは、貧乏で、おまけにお父さんが亡くなつて、いまは、病身のお母さんと、三人の妹や弟がありました。十六になつたばかりのお桂ちゃんは、働いて四人の家族を養わねばならないのです。

雑誌をつくる製本の仕事はたいへい、うけとりといつて、仕上げたタカによつて、お金を払うのです。たとえばいまお桂ちゃんのやつている八枚ずつそろえて百通り、

八百。ん身体をうごかして、四銭五厘です。お桂ちゃん  
は熱心で、きようですから、調子のいいときは、十時間  
のうちに二千冊分を仕上げます。それで丁度九拾銭：  
。。。

チャツ、チャツ、チャツ……。

お桂ちゃん、一生けんめいです。

「あらッ、追越されちゃった」

となりの仕事台のおせいちゃんが、くやしそうに横目  
でにらみました。

「なに負けるもんか、あの指輪はあたいのものよ」

向う側の、花ちゃんが、桃割れのあたたまをゆすぶって  
云いました。お桂ちゃんも、おせいちゃんも、仕上げた  
しるしの赤札が三枚ずつ、花ちゃんが四枚、二十人もい  
るうちで、四枚仕上げたのは花ちゃんだけ、それに追っ  
つこうとしているのは、お桂ちゃんです。

「あがりーい」

四枚目の赤札を受取って、息をハズませながらお桂ち  
ゃんが、またどなりました。

「くやしいッ」

皆は口のうちに、そう叫びました。

### 三

なぜ、この女工さんたちは、こんなに一生けんめい  
でしょう、いつも熱心だが、今日は格べつです。こんな  
敵同士のようににらみ合つて、競争しているのは――  
なぜでしょう？

それは、この工場が一番向うの工長さんの机のとこ  
ろを見ればわかります。

「このたび、技術奨励法として、二千冊分をいちば  
ん先きに仕上げた人へ、金の指輪をあげます。」  
と書いた紙がはつてあつて、工長さんの机の上に、  
赤と紫のリボンでかざつた指輪の箱が乗せてあるの  
です。

誰だつて金の指輪は欲しい――まして貧乏な女工さ  
んたちに、金の指輪なんかめつたに買えるものでありま  
せんから……。

### 四

チャツ、チャツ、チャツ……。

みな いじょう  
皆は一生存けぬいでした。わきめもふらず、唄もうた  
わないで……自分こそ一等になつて、あの指輪を——と  
おも  
思いました。

しかし、そのうちでも、花ちゃん、お桂ちゃん、おせ  
いちやんは、目立って早かつたのでした。

おひるすぎて二時頃になると、花ちゃんはもう、十六枚  
目の赤札を受取りました。アト四枚です——おせいちや  
んが十四枚、そしてお桂ちゃんが、十五枚目——

競争は、花ちゃんとお桂ちゃんになりました。ひろい工  
場中は寒くて、紙でガサガサになつた指先は、石のよ  
うに冷めたく、指先のヒビから血が出そつでした。

「アツ」と、そのときお花ちゃんが叫びました。固い紙  
の切れ口に指がさわつて、指先が切れたのです。血がブ  
クンと吹き出しました。お花ちゃんをあわてて、ばんそ  
うこうをハリました。そしてまた、こんどは、お桂ちゃ  
んが指をきりました。

しかし、二人とも、手を休めませんでした。お桂ちゃ  
んは、歯を喰いしばつて、チャツ、チャツ、チャツ……。

「あがり——い」

お桂ちゃんは十八枚目で、お花ちゃんと同じになりま

した。お花ちゃんはあわてました。ちようど、午後の四時  
に、眼を赤くしたお桂ちゃんが、息もきれぎれに叫びま  
した。「あがり——いッ」

おお、それは、いままでにない早いレコードでした。  
お桂ちゃんが一等になつたのです——

## 五

皆は工長さんの机の前にならびました。

社長さんが来て、紫と赤のリボンで飾つた指輪を  
お桂ちゃんに渡しました。それから社長は、口髭を撫で  
ながら云いました。

「皆さんは、非常に仕事が早くなりました。世間は不景  
気で、会社も困つているので、明日から、うけとり値段  
の四銭五厘を、四銭に下げます」

皆はビックリしました。これは大変だ——どんなに仕  
事が早くなつたからつて、身体はそれだけ疲れるんじや  
ないか——

お桂ちゃんは、指輪を持つてうつむきながら考えまし  
た。——会社はあたい達に指輪というエサで、あたい達

の貸銀を下げるんだ、これは大変だ——

お桂ちゃんは、決心すると、ツカツカと社長のまえへすすんで云いました。

「あたいは貸銀値下はほんたいです。こんな指輪なんか欲しくないよッ」

いきなり指輪を社長の顔へたたきつけました。

(おわり)

二〇二四年六月一五日 初稿 公開

二〇二六年三月一四日 第二稿 公開

【解題】

〈初出〉『少年戦旗』第二卷第三号（一九三〇年三月号）

※表題に「少女小説」と冠している。

〈選集等〉『日本児童文学大系3―プロレタリア童話から生活童話へ』（三二書房、一九五五年六月）

『日本ジュニア文学名作全集6』（汐文社、二〇〇〇年三月）

『一冊で読む日本の名作童話』（小学館、二〇〇四年十一月）

※本稿では初出を底本とし、各版を参照して校訂した。漢字や仮名遣いは新字に改めている。

入力・校訂者 Ⅱ 和田崇